

## 19世紀アメリカ聾教育史における宗教

上野 益雄\*

アメリカ聾教育史において、19世紀の聾啞施設では、宗教がその教育において大きな役割を占めていた。当時の教育を担ったのは主として、会衆派の牧師たちであったが、①彼らは何故聾啞教育に携わったのか。②彼らは何故手話を教育の手段としたのか。以上の2点について考察を加えた。教師たちは、一般の人々に福音を伝えるよりも、聴覚を閉ざされた聾啞者に福音を伝える方が神の意志に適っていると考えた。彼らの宗教観は、神については、教えなければ分からないという立場であった。そのために、聾啞者がすでにもっているジェスチャーの手段を積極的に利用した。一方口話法を進めたS.G.ハウたちの宗教観は、言語を有し知識を持つことによって神は自然に理解されるというものであった。この考えの相違が、手話を用いるか用いないかの違いとなった。

キーワード：宗教 ユニテリアン 聾啞施設 H.P.ピート

### 第1節 問題提起

19世紀前半の手話の時代、いいかえれば聾啞施設の時代において、宗教教育は中心的な位置を占めていた。宗教教育を抜きにしてはこの時代の聾啞教育を考えることは出来ないくらいである。19世紀前半という時代を見る時、全体的には、アメリカ社会における宗教の内容は、東部のカルヴィニズム中心のオーソドックスな宗派からいくつかの新しい宗派に分かれてきた時代であり、宗派性から非宗派性へと向かう時期でもあった。中でもハーバード大学を中心とするユニテリアンの勢力の拡大は著しいものであった。大学の教育は宗教性を重んじながらも、牧師養成から科学の探求へと重点が移り、初等教育にあってはオーソドックスなピューリタンの信仰から万人の神の崇拜へと移って行きつつあった<sup>1</sup>。

1830年代から起こってきたコモン・スクールに代表される初等教育への関心の高まりは、伝統的なカルヴィニズムからでなく、人間の理性への信頼および人間の本性の善性を強調したユニテリアンの貢献が大きかった。この考え方によれば、各人は聖書と自己の良心の自由を守ることによ

て、自分自身を救済できるのであった。それは「啓蒙時代の楽観的信条と将来に期待する社会的諸理想とを、社会の改善に捧げるキリスト教のリベラルな信条に関連づけられた」<sup>2</sup>。19世紀のさまざまな社会改革運動、人道的福祉活動などを積極的に推し進める先頭に立ったのは、従来のピューリタニズムではなくユニテリアニズムに立つ人々であった。このようなユニテリアニズムは、公立学校設置運動にも大いにその力を注ぎ、すべてのものに教育を受けさせる努力を続けた。ピューリタンたちは、生活の中心を来世におき、ユニテリアンたちは現在の社会の改革、不幸・不便の追放に心を注いだのである。18世紀末から起こった理神論およびそれほど急進的ではないユニテリアニズムは、人間の理性と科学の進歩を信じて、社会悪の排除、社会改革に熱心に取り組んだ。それと平行してオーソドックスな組合派、長老派などのリヴァイバルも起こったが、19世紀の中葉から後半にかけて、近代科学に裏づけされた知識とそれを柔軟に受け入れる理性の宗教が社会をリードするものとなったのである<sup>3</sup>。

初等教育の進展が宗派性から非宗派性へとそしてやがては公教育における無宗派性へと進んで行くさなかに、聾啞施設の教育は、伝統的なピュー

\*心身障害学系

リタンたちによって支えられていたのである。彼らの神学は、現世の生活は来世の生活のための準備であるという考え方が強かった。新しい宗教は現在の社会生活に重点が移り、教育においても、良き市民を作り、知識を授け矛盾のない社会を築くことが目標になった。1867年設立をみたアメリカ最初の口話法の聾啞施設もこれら一連の流れの端に加えられるものである。すなわち、H.マン (Horace Mann, 1796-1859) <sup>4</sup>や S.G.ハウ (Samuel G.Howe, 1801-1876) その他ユニテリアンたちの努力によったものである。

しかしながら、本稿において見ようとしている施設の教育状況は、エール (Yale) 大学出身の組合派の教師たちを中心とした指導であった。筆者は手話体制の成立要因の一つとして、宗教教育をあげる。もちろん「アメリカ合衆国で1800年以後に発展したキリスト教は、きわめて特異なものであった。それは今までこの国にも、いつの時代にも見出だされないのであった」<sup>5</sup>と言われるように政教分離つまり、教会と社会の分離している教会、各個独立の自由教会、エキュメニカル (ecumenical) な考え方も出てきたこの時期ではあったが、聾啞教育界においてはやはり伝統を引くピューリタンの立場のものによる教育が主であり、その教育はオーソドックスな信仰による伝道活動の一環としての意味合いが強かった。本章においては、この手話時代の教育をさらに詳しく見ることによって、当時の教育の目的である宗教教育と教育方法としての手話の関係について明らかにすることを目指している。

つまり

- ① 何故教師たちが聾啞教育に携わったのか。
- ② 何故彼らは手話を教育の手段としたのか。

以上の2点である。

## 第2節 教育の目的

聾啞施設における教育の目的は宗教・道徳の教育であった。その当時の教師たちの出身、青年時代の宗教的回心、聾啞教育に入った動機などを知るとき、われわれは、この教育がいかに神の教えを説く伝道者の仕事と似通って考えられていたか改めて感じさせられるのである。

ハードフォードの教師L.H.ウッドラフ (L.H. Woodruff) は、

「(この教育は)広い観点から見ると、まだ啓発

されていない人々の間で働く宣教師の仕事と多くの点で似通っている。これは、慈善的な機関の一大システムであり、それによって人々はキリスト教の福音に参加するよう高められ、そのよい実<sup>6</sup>をつけるように教えられる。われわれの務めは、聾啞者に十分な永遠の力を及ぼす福音への道を示すことである」<sup>7</sup>

と言っている。

一般の教育機関において宗派性の問題の議論が高まり、科学技術の知識への関心が高まるなかで、聾啞施設においては、まず人間としてのありかたの問題が中心となっていた。理性と科学が主役となる時代へ向かう流れを、進歩と捕らえるこの考え方がまた一般的解釈でもあった。この19世紀の時代として特徴的な、進歩という観点から見ると、聾教育に携わったものたちの考え方は時代から取り残されたものと見なされるかも知れない。この手話時代の聾啞教育についてこれまで何も関心が持たれなかったということが、このことをよく示していると思う。聾啞教育をここではまた別の面から見る試みも可能ではないかと筆者は考えている。ともあれ、この時代の施設の教育者たち、設立者たちは、この教育の計画を神へ敬謙な気持ちと、キリスト教徒としての慈善の徴しと考えていた。

「聾啞者たちは、異教徒と同じように、神を知らずにキリスト教の希望、知識、慰めから締め出されており、知的にも道徳的にも暗闇の中に残されている。この人々のために福音を伝えることが施設の設立の目的」<sup>8</sup>

であった。

さきのL.H.ウッドラフは、教育の目的を、

「われわれの施設は、一般の高等学校 (high school) や大学 (college) とはその性格と目的を異にしている。その目的は知識を授けることだけにあるのではなく、より総合的な計画のもとに聾啞者の現在と未来の福祉のために役立つものを与えることにある」<sup>9</sup>

と述べている。

ただ単に知識を授けること、言語を教えることは第一の目的ではなかった。もしそれだけでよしとして、道徳的・宗教的教育に失敗をするならば、せっかく荷物を積んでいる船が、その荷物を役立つことなく、海の中へ沈めてしまうことと同じことになると考えた<sup>10</sup>。

ケンタッキー聾啞院の院長J.A.ジェイコブス(J.A. Jacobs)は、やはり教育の目的を、「…キリストの福音を十分に生徒に伝えること、そのことによって、彼らの魂を救うこと、これがわれわれの重大な義務である。どんなことを教えたとしても、われわれがこのことに失敗するならば、われわれは主要な仕事に失敗したことになる。宗教教育は、聖日に限らず、毎日の学習に含まれるもので、真理を伝える機会を逃してはならず、神の福音の約束を伝えねばならない」<sup>11</sup>と捕らえていた。

「聾啞教育に30年間携わって、最も大きい喜びは、生徒に宗教教育を授けることであり、大きな慰めでもあった。この時つまり、キリストの知識を生徒に教え、生徒が徐々に無知から開放されて知的になっていくのを見るのが、唯一の幸せな時間であった」<sup>12</sup>。

言語指導に人一倍熱心であり、方法的手話を提案しH.P.ピート(H.P. Peet)と激しい論争を展開した彼も、聾啞教育の主要目的を宗教教育として考えていたのであって、そこでは手話が重要な役割を持っていたのである。

ずっと昔から現在にいたるまで、言語を持たない聾啞者は人間としての証しを欠いた悲惨な存在であると幾度となく繰り返言われてきた。そしてこの19世紀の手話時代においても例外ではなかった。この時代の教育者たちも「われわれは、生まれつきの聾というものを、人間に降りかかった最も厳しい悲惨さの一つとみている」<sup>13</sup>と同じように言う。それは、確かに音から閉ざされることによって、人間のさまざまな刺激や活動から閉ざされること、そして何よりも社会の中のコミュニケーションから隔離され、耳からの知的な情報から遠ざけられることであった。しかしこの時代の教育者たちの言う意味は少し違っていた。

「聾啞児たちは、彼らより幸運な仲間たちと同じような自然な性向(natural traits of character)を示すかも知れない。けれども彼らは異なった人間なのである」<sup>14</sup>と考えた。

どこが異なっていると言うのか。制限された知識、情報の不足は当然であったが、実はそれだけではなかった。それは神を知らないということにおいてであった。ここで普通の聴児と同じ性向を示すと言っているのは興味深い。というのは20世

紀の時代においては、実はこの意味でこそ、つまり聴児という一般の人たちと異なった人格、もつと云えば歪んだ人格を持つことこそ、悲惨であることと考えられたからである。この点では、この時代の教育者はわれわれの時代の考え方とは違っていたということである。

ハートフォード聾啞院の教師からオハイオ聾啞院の院長になったC.ストーン(C.Stone)牧師は次のように説明をしている。

「…聾啞児の心は、自分を永遠に生かされるものとして見る重大な現実に関して完全に白紙なのである。彼は、神の存在、自分自身の魂、未来の生活について何も知らない。試練、責任、報いは、彼がみじんだに考えもしないことなのである。もし彼が教育の恩恵を受けずに死んだなら、彼は全くの暗黒の中に死ぬことになる。しかもこのキリスト教国に住みながらである。…彼の牢獄の扉を開け、真実と宗教の慰めの光をさし入れることは、慈善の心を持つものはだれしも深い関心を持たねばならない仕事である」<sup>15</sup>

教育者たちは聾啞者を特別な異質な人間とは見ていなかった。このことは筆者が扱う論文全体を通じて流れているテーマである。手話によって聾啞者の心を理解しよとしたこと、手話によって人間として必要な知識を得られると考えたこと、このことは後の口話法の考え方とは対照的である。彼らはキリスト教の社会、キリスト教の家庭にありながら、神の福音を知り得ないことが悲惨であると考えたのである。

父親の考え方を忠実に継いだとされるI.L.ピート(I.L. Peet)も

「彼ら(聾啞者)の心が包まれている暗黒の結果、教育を受けない聾啞者は神についての真の概念を持たず」また「彼らは神の正しい概念を形作ることができない」<sup>16</sup>と述べ、

C.ストーンも次のように言うのである。

「聾啞者の本当の悲惨さは、人間の正常な声から閉ざされていることではない。科学や文学の宝庫から閉ざされていることでもない。長い年月の進歩で積み重ねられた哲学や歴史から閉ざされていることでもないのである。そうではなくて、神の光が彼には決して届かないことなのである。キリスト教社会の真ん中であってさえ、もし彼の孤独に対してある種の手が差し延べられず、世界についての考えを遮っている魔力を破らないとした

ら、将来のことを暗黒の内に手探りする外なく  
なってしまう」<sup>17</sup>

アイオワ聾啞院の院長であったW.E.アイジャ  
ムズ (W.E. Ijams) は、やはり社会における一般  
的教育の高まりを十分承知していた。1846年自ら  
私的に聾啞教育を始めた人であったが、リベラル  
な考えを持つと言われた彼は、教育について次の  
ように述べている。

「教育はその所有者にとって災いにもなる。知  
識は破壊的な力を持つかも知れず、社会のために  
益にならないかも知れない。一般に言われ考えら  
れているような教育の性質と効果は、必ずしも正  
しくないのである。

科学は両刃の剣である。墮落した人の手にわた  
ると真理を脅かすものとなる」<sup>18</sup>。

彼はまた次のように言う。

「宗教—それは科学ではない—は、世界を引き  
上げる力である。宗教と科学は同じものでない。  
宗教の方が上位なのである」<sup>19</sup>。

聾啞教育の中心的課題は言語にあったが、以上  
見て来たようにその根底には宗教・道徳の教育と  
いう目的があった。このことはいくら強調しても  
強調し過ぎることはないと考える。

聾啞教育に携わるものたちは、彼らのこの世界  
へ入った動機を調べると分かるとおりに、牧師にな  
ることを希望したものが多かった。彼らの多くは、  
カレッジの青年時代に回心を経験し、キリスト教  
徒として信仰告白をし、自分の生涯の職業につい  
て何が神の意志に沿うものであるかという問題に  
行き当たった経験を持っていた。そして、この聾  
啞教育という仕事に、神の福音を述べ伝えまだ救  
いを知らないものにキリストの恵みを伝えるとい  
う、伝道者と同じ使命を見いだしたのであった。  
聾啞教育の第一人者であったH.P.ピートがハ  
ートフォード聾啞院に働き始めた時、牧師となっ  
てその才能を発揮させるよう望んだ友人たちも、施  
設の実際を見学して福音を述べ伝えるに最もふさ  
わしい仕事であると納得したことを思う時、当時  
のピューリタンの子孫たちが、クリスチャンにな  
ることを何にもまして優先させたことが伺えるの  
である<sup>20</sup>。ハートフォードの施設の設立者たちは、  
教師の選択に際してT.H.ガローデット (T.H. Gal  
laudet) やH.P.ピートの出身大学であるエール大  
学へ、優秀な適任の学生を推薦してくれるように  
依頼したのであった<sup>21</sup>。

世の中は非宗教に向い科学の時代へ入る兆候を  
示していたが、一方では、同時に信仰復興 (revival  
movement) の時代でもあった。もちろん非宗教に  
向かうと言っても、無宗教とは違うことは言うま  
でもない。18世紀後半から勢力を持ってきた理神  
論にしてもユニテリアニズムにしてもまた19世紀  
のコンコード・グループ (ccncord group) を中心  
とする超絶論 (Transcendentalism) にしてもオー  
ソドックスな宗派と鋭く対立したが、広い見方から  
すれば、同じキリスト教の基盤にたった考え方で  
あり、それが時代をリードして行ったものも事  
実である。これらの基盤から、近代聾教育を推し  
進めた口話法は生まれたものであり、手話時代の  
聾教育者たちの宗教観とは異なっていたと筆者は  
推測している。

### 第3節 H.P. Peetの言語観

ヨーロッパの聾啞教育の流れを教育方法の観点  
から二つに分けて捕えることができる。すなわち、  
聾啞教育において音声言語こそ必要であるという  
立場、つまりJ.C.アンマン (J.C. Amman), S.ハイ  
ニッケ (S. Heinicke) の流れと、もう一つは、J.  
カルダン (Jerome Cardan), C.M.ド・レベ (C.M.  
de l'Epee) の文字記号を音声言語と同等の価値を  
持つ、従って同じ記号である手による記号、手話  
も教育の手段になり得るとする立場である。

アメリカの聾啞教育においては、T.H.ガロー  
デット (T.H. Gallaudet) はさらに積極的に手話  
を教育手段として認め<sup>22</sup>、H.P.ピート (H.P. Peet)  
ら彼に続く教育者も手話を大切に考えた。確かに  
アメリカ初期の手話時代の聾啞教育においても、  
手話が使われ過ぎている手話を使わないようにす  
べきであるといった議論がなされていたことは事  
実ではあるが、基本的にはコミュニケーションの  
手段としての手話は否定されていたのではなかつ  
た。特に宗教教育に関しては、手話の意義が積極  
的に評価されていた。

「創造主は何故この視覚言語を行う目的のため  
に、このように精巧で素晴らしい筋肉の装置を  
与えて下さったのか。…そして、もしこの視覚  
言語が今よりもっと育成され、学校でも家庭  
でも他のセミナーにおいても、児童や青年の訓  
練に用いられるならば、我々は教育のすべての  
課程において喜ばしい結果を見いだすのであ  
る」<sup>23</sup>

とT.H.ガローデットは言っている。

H.P.ピートと論争をし、英語の語順に沿った人工的な手話記号の使用を提案したJ.A.ジェイコブス (J.A. Jacobs) でさえも、「私は、聖書の教育においては日常の手話を使う」<sup>24</sup>と述べているのである。

このように手話が重要視されていたことは、他の時代に比べて著しい特徴を示すのであるが、さて、19世紀の手話時代の代表的聾教育者であるH.P.ピートは、人間の言語の起源と宗教意識についてどのように考えていたであろうか。我々は、聾教育史におけるJ.C.アンマン (J.C. Amman) やS.ハイニッケ (S. Heinicke) について知っている。17世紀のJ.C.アンマンは、旧約聖書に則って、スピーチこそが人間にのみ神から与えられた言語であり、手話は言語ではないと考えた。それ故スピーチを持たない聾啞者ほど悲惨な存在ではなく、神から見放された存在ではないことを示すためにスピーチ指導の可能性を確かめた。S.ハイニッケの時代になると、さすが神から与えられたアダムと言語という用語は使われていないが、音声の言語こそが人間としての理性をあらわすものであった。従って聾啞者が理性を持つ人間であるためには、スピーチを獲得する必要があった。これに対してアメリカのこの時代の教育者たちは、手話も神が与えてくれた言語であり、その素晴らしさを評価したのである。T.H.ガローデットは、音声による話し言葉の長所と同時にその短所もあげ、音声の言語にはない手話の長所もまたあげている<sup>25</sup>。またH.P.ピートも手話言語の特徴をあげている<sup>26</sup>。彼らの言語観は、J.C.アンマンやS.ハイニッケ、また口話法を主張したS.G.ハウ (S.G. Howe) たちの言語観とは異なっていた。

H.P.ピートは、教育を受ける以前の聾啞者の宗教意識は何であるかという設問を設定した<sup>27</sup>。教育を受ける以前の聾啞者宗教意識という問題は次の節で扱うとして、この節では、この時期の代表的な教育者であるH.P.ピートの言語観を手話と宗教教育との関連から見ることにする。

当時の聾教育者たちの中心的な課題は、聾啞者に神の存在を知らしめること、永遠の生命を知らしめることにあった。彼らは聾啞者の潜在的な言語の獲得能力、理解能力を認め、手話言語による福音の伝達を有力な武器と考えていた。しかし、聾啞者が、家庭礼拝であるいは公同の礼拝に出席

して、見よう見真似でキリストの救いの意味を理解するものだとはいえなかった。だから、手話言語によって福音を理解させることによって初めて真の信仰が得られるものと信じていた。「言語の起源についてどのような意見の相違があろうとも、言語を所有しているか、言語の獲得能力のあることが、人間としての確実な証の一つである」<sup>28</sup>と言っているが、この場合の主語は手話をも含んでいた。

「言語がなくては知的発達には達せられない。言語とは文字 (words) によるもの手話 (signs) によるものいずれをも含む」<sup>29</sup>と述べ、また

「知的・道徳的発達が、文字の読めない聴者よりも遙かにすぐれている聾啞者がいる。たとえ彼が文字が読めない場合であってもである。スピーチが人間の機構に自然に備わっているように、ジェスチャーの言語も人間の機構に自然に備わっているものということをつけ加える必要がある」<sup>30</sup>そして「聾啞者が無知、無能である原因は、スピーチがないためではなく、改善され発達した手話言語を持たないためである」<sup>31</sup>と言っている。

聾啞者の知的・道徳的状態について、彼は正しい情報を得る手段である言語の欠如であるとした。一般に広く行き互っている誤った意見として、「聾啞者は正しい情報を得ることが出来ないのではない。観察力と思考力の欠如にある」<sup>32</sup>と考えられていた点を指摘している。つまり、聾啞者は物を見るし外界の様子もしることができる。記号や文字も見ることができる。にもかかわらず、観察力、思考力のないために欠陥のあるものだという偏見を指摘しているのである。現在では常識的と考えられていることも当時にとってはまだまだ人々の聾啞者に対する理解は誤ったものであった。言語に関する哲学的思想を抜きにしても、聾啞者がスピーチをするということを示すことは、一般の人々の偏見をなくす最も効果的な方法でもあった。教師たちは手話も音声の言語とまったく同じように神が人間に与えた言語であった。この言語が聖書の知識と福音を伝える主要な用具であった。

H.P.ピートは、人間の宗教意識について二つの考えのあることを示している。その一つは「啓示の光によって照らされてこなかった国民が宗教に関してどのような知識を持とうとも、その知識が

古い族長時代から伝えられ、ぼんやりした伝統を通して引き出されるもの」<sup>33</sup>であり、他のものは「人間の宗教心といったものが自発的に発達したものとしての、異邦人の粗い概念であり、すべての人が知的・道徳的発達のある段階において、神の働きを認識し、人間の死の生来の恐れから魂の不滅を求めるもの」<sup>34</sup>である。

H.P.ピートは、聾啞者にも神の啓示が示されるという考えにたいして次のように言う。

「聾啞者は、模倣の能力と目に見えるものからの楽しみから私的なまた公的な礼拝に出席するが、言語の欠如のために知ることが妨げられているのに対して、神は特別に啓示を示すと考えるものがあるが、(それでは)何故、他の何万という異邦人にはそのような啓示が示されていないのに、聾啞者には啓示が示されると言えるのか」<sup>35</sup>

彼は言語によって神を教えなければ、聾啞者に福音は伝わらないという考えであった。

生まれつきの聾啞者は、音声の言語を獲得しない、ということは言語は人間にそのまま備わるものではないということがわかる。また、聾啞者は自発的に感情を表す叫び声などを出す、長い努力によって訓練しない限りは決して音声の言語は発しない<sup>36</sup>。しかし音声の言語を発しない代わりに生来の能力から、もし回りに彼の手話を学び、受け入れ、社会的な交わりを喜び合う優しい人がいるならば、ジェスチャーという表現の言語を作り始めると言う。「聾啞者はPsammetichosが夢にも思わなかった結果を実験して見せてくれる」<sup>37</sup>という。「人間は、もし仲間がいるならば、ジェスチャーを用い、また簡単な音声を出して言語を作り上げていく」<sup>38</sup>そして、人間は経験したことについて表現の欲求を持ち、実際に感じたことについて思いを告げることが出来るようになるという。「聖書も“アダムはすべての野のけもの、すべての空の鳥が彼の所に連れて来られるとその名前をつけた”と書いてある」<sup>39</sup>と言う。

彼はJ.C.アンマンと同じように言うのである。「聖書の信条一つまり、最初の人間は知的にも身体的にも最高の完全さを持つということ一を、退ける必要はない」<sup>40</sup>と。しかしJ.C.アンマンは、手話を排斥し、H.P.ピートは手話を神が与えた大切な言語であると考えたのである。

## 第4節 二つの宗教観

### 1 聾啞者の宗教意識

聾教育者の主要な目的は、聾啞者に対する宗教教育ということにあった。そこで、聾啞者の宗教意識、特に教育を受ける以前の宗教意識について関心をもたれていた。教育を受ける以前にすでに神についての概念をもっているとする立場と、教育を受ける前には神についての概念はもっていないと考える立場があった<sup>41</sup>。聾啞施設の教師たちは、おおむね後者の立場に立っていた。

この立場の違いが、教育方法の違いと深い関係にあったと筆者は推測している。そのことを考察する前に、ここでは教育を受ける以前の聾啞生徒たちの宗教について、教師たちが行った調査をみることにする。教師たちは、自分たちの宗教信念、自分たちの信仰の教義を確認するためにこの実験をなした。ハートフォード聾啞院においてもニューヨーク聾啞院においても、聾啞者の宗教意識についての研究・調査がなされた。

ハートフォードで教育を受け、現在は最上級のクラスにいる生徒たちに、教育を受ける以前の宗教意識について質問をし、彼らの証言によって聾啞者の宗教意識について探る試みがなされた。その報告では共通する代表的な答えをあげて見る<sup>42</sup>。(創造・創造主について)

質問 あなたが施設での教育を受ける以前、創造主について何か考えていましたか。

答 家庭にいたころは、神については何も知りませんでした。世界の救い主、罪の贖い主について私の心は、白痴のように暗いころでした。

(魂・死について)

質問 あなたは、あなた自身の魂について何か考えましたか。もし考えたなら、どのようにしてその考えを得ましたか。

答 幼い時から、自分自身の魂については何も知りませんでした。それが私の体と結合していることは知りませんでした。私が最初に施設へ来たとき、先生が説明してくれましたが、それは決して忘れないでしょう。

(神について)

質問 いつどのようにして、神についての概念を最初に得ましたか。

答 14歳のとき施設へきました。前の院長であったG先生がカテキズムで私に教えました。神は霊である。神は善である。神は永遠である。私

はそれを聞いて不思議に思いました。私は以前よりも神について知るようになりました。

T.H.ガローデットは、次のようなコメントをしている。

「この問題はずっと私が聾啞教育に携わっている関心をもち続けた問題である。生まれ付きの聾啞者がだれか友人からあるいは施設で、これらのことを教えられなくては彼自身の中から創造主についての概念を考え出すことは出来ない。また霊的な概念、魂の永遠についての概念を生み出すことは出来ないのである」<sup>43</sup>

ニューヨーク聾啞院においてもH.P.ピートは同様の実験・調査をしている<sup>44</sup>。

聾教育者たちは、教育を受ける以前の聾啞者はそのまま自然には神についての正しい概念が作れないという考えであった。何故教師たちはこのような調査を行い、自分たちの主張の裏付けをしようとしたのであろうか。こうした問題の背景には教育方法の違いの問題があった。手話を廃止して発音による指導を主張したS.ハウ (S.G. Howe) らは、神の概念は言語を習得し、知的に発達するうちに自然に理解されるものだという考えをもっていた。その根底には両者の信仰の違いがあった<sup>45</sup>。少なくとも聾啞施設の教師たちは自分達の信仰とS.ハウらのそれとは違っているとしていた。

## 2 宗教観の相違

聾啞施設の教育者たちは、教育を受ける以前の聾啞者が神の概念を理解出来ないことを実証しようと試みた。聾教育者たちの主要な目的は、キリストの福音を伝えることであった。それは教えずには理解されないものであった。神を知らない状態こそ最も不幸な状態であると考え、意図的に教えるべきことであった。この点に関しては伝統的ピューリタンの信仰を初期の教師たち受け継いでいたのである。

神を知らない心は、暗闇に包まれている状態であり、その結果として教育を受けない聾啞者は神についての真の概念をもっていない。聾啞者が施設へ来る前に持っていた手話は、使用する相手にも恵まれず、まだまだ未熟なジェスチャーであってコミュニケーションの用具としては不十分なものであった。親や友人はもしジェスチャーを使ったとしても、感覚できる具体的な対象物の境界を越えて彼らの概念を引き出すことに成功しないの

であった。

「彼らは肉体の存在と区別して、内なる思考を考えることは難しい。それ故霊である神の正しい概念を形成できない。

祈りの時間、神という語が聖書の上で指さされ、目は天の方を向く。そのように聾啞者は、上にいますものを理解させられる。しかし、その性質、本質については彼らは何も明確な概念を得ることはない」<sup>46</sup>

施設で教育を受けた最上級の聾啞生徒たちが、宗教意識について尋ねられ、その結果、「私は何も知らなかった。魂についても、内面において何があるのか知りたいという気持ちも起こらなかった」という答が多かった。

教育を受ける以前の宗教的真理についての知識では、聾啞者の家族や親族でさえ誤って理解している。正しく理解されることは、聾啞者にとって重大なことである。まわりのものにとっては当然のことも、聾啞者は幸福に関して大切なことにかに無知であるか。聾啞者は理性をもっている。神の存在と摂理の証拠は彼のまわりにある。彼は親しいものの死に行くところに座することもある。再び会えるのか、恐らく彼はクリスチャンの家庭のメンバーであろうが、大切な福音の外におかれてしまっていると言うのである。

「彼はしばしば神の名を、神のいることを示す天を指さす。日曜日は安息日で労働はしない。神の家では敬謙な態度を取る。聖霊の存在について何の概念も持たないと考えられない。しかし、光の雰囲気の中に囲まれながら、彼には殆ど真理は入って行かないのである」<sup>47</sup>

現在の我々から考えると調査せずとも自明のことであり、何故このようなことを問題にしたのかと思われるのであるが、キリスト教的雰囲気の中であったことを理解する必要がある。またこの問題には伝統的カルヴィニズムから19世紀を通じて普及した普遍的な宗教心といった人道的な神観念という、言ってみれば宗教的ヒューマンリズムの問題にまたがっていたと考えられる。

H.P.ピートは「誰からも助力を受けないで自分自身の観察と思考の力によって、宗教的な事柄に関する正しい概念を得た聾啞者の確かなケースは今までになかった」<sup>48</sup>とまとめている。

多くのものが死についての恐怖の感情を言い表

している。未熟なジェスチャーでは正しい意味は伝わらない。

「誰も体から離れた霊的な状態で死後の魂の存在についての概念を見いだしたものはいない。友人や親たちにしてもこの点についての正しい概念を伝え得るジェスチャーの技術を持ったケースはいなかった」<sup>49</sup>

死後のことについては、回りから説明を受けてはいるものの、たとえば、死後は墓から取り出されて天に行くとか、体が火に投げ入れられるとかいう子供っぽい理解をしているのがせいぜいであった。一人の聾啞児は兄のジェスチャーによって、善人の体は腐らずに目が覚めるまでそのまま、悪人はうじ虫の餌食になると理解していた。教師たちは、言語（手話言語を含めて）によって正しい知識を得させることが必要であり、そうでなければ、決して正しい信仰に至らないと考えた。

当時の代表的な教育者の意見はこのような考えであった。T.H.ガローデットは「この問題の指導なしには、自分自身の考えからは創造主すなわち世界の道徳的支配者についての概念を形成することはできない」<sup>50</sup>と述べW.W.ターナー（W.W. Turner）も「事実は簡単である。教育のさまざまな段階で注意深い調査の結果、最も知的な聾啞者たちがみな次のことを明らかにした。彼らは教育を受ける前には神について、また自分の魂についての概念は持たなかった。この問題について考えもしなかったし、考えたにしてもずっと幼稚のままであった」<sup>51</sup>と述べている。

ペンシルベニア聾啞院のA.B.ハットン（Abraham B. Hutton）も「16年の聾啞教育の経験から、生まれ付きの聾啞者は、我々のまわりのものをすべて創造し、治める霊的概念、全能者である神の概念を持つという証拠は見いだせなかった。多くの粗雑な考え方、たとえば、空、巨大、老人、強力、雷、星などの概念を持ち、しかもこれらの概念は友人たちからのジェスチャーか絵画から得たものである」<sup>52</sup>と述べている。

以上のような考え方に対して違った考えをする立場がS.G.ハウ（G. Howe）であるとH.P.ピートは言う。H.P.ピートによれば、S.G.ハウは1845年のレポートで、ローラ・ブリッジマン（Laura Bridgman）が、「自分から神の存在に気づき」毎日繰り返す自然現象の説明を求めて超人間的な能力を示したことを報告しているという。1843年のレポー

トでは、「神や精神的なことについて彼女を指導しようと試みた折り、神、魂、天などと言ったことの説明を求めた」と述べているのである。H.P.ピートは、この時すでにローラは、指導の教師によって、日常の会話においても指導の際においても宗教的なことを教育されており、S.G.ハウがヨーロッパへでかけている間に知識を得ていたのだと主張した<sup>53</sup>。S.G.ハウは自分の宗教的信条を裏付けるために“ローラが自分から神の存在を知った”と主張した。1843年は彼がヨーロッパ旅行へ行った年である。S.G.ハウはヨーロッパから帰って聾啞児に発音の指導をすることを立法部提案している。S.G.ハウによれば、宗教の教育は言語の指導がなされて以後のことであった。“言語を持たなければ思考の発達はない”というのが、S.G.ハウの考えであった<sup>54</sup>。そして言語を形成することによって宗教的概念が生まれるというものであった。S.G.ハウは、ローラに対して神、魂といった事柄については、教育を開始して5年目まで待つのがよいとした。言語を獲得し十分に理解できる知的な発達段階に達するまで宗教教育はする必要がないというのが彼の理由であった。H.P.ピートは、次のように言うのである。S.G.ハウの指導は、音声の言語による指導であるので、生徒への知識の伝達、コミュニケーションの手段を持たない。

「聾啞者にとって音声言語の手段では、語（word）の獲得は遅く、労力のいるもので」<sup>55</sup>ある。われわれの手話による手段では、生徒と心を通わせる手段を持っている。聾啞施設の教師たちは、生徒の教育の最初の段階から宗教教育を始めることを義務としているのだと。

14歳にもなって施設の教育を受ける生徒にとって、宗教の教育を5年も遅らせることは現実的でなかった。生徒の年齢から見て道徳的な判断を教えることは教師たちにとって必要とされたことでもあった。彼らは生徒が施設へ入り、コミュニケーション手段が取れるとすぐに宗教教育を考えた。

「聾啞者のための我々の施設で行われているシステムに関しては、教師は非常に早い段階で、手話言語をとおして生徒の心に接近しうる」<sup>56</sup>それは「概念を表す記号であり社会的なコミュニケーションの手段でもある。聾啞の生徒は自分で話せるコミュニティのあることを知る。語（word）のみでの指導では何年もこれまで眠っていた能力が2・3ヵ月の間に多くの進歩を見せる」<sup>57</sup>という考



え方であった。

## 第5節 結 語

聾教育における教育方法の違い、つまり発音の方法を取るか手話の方法を取るかの違いには、宗教観・言語観の違いがあった。

一方はキリスト教の神の概念は自然に理解されるものではなく、聖書に見いだされる啓示は特別なものであって、理性をこえたものであった。そして人間の原罪を認め贖罪の信仰に立ち、信仰生活の中心を来世においた。生活の目標を来世においた故に、現世の生活はより真剣であり勤勉でもあった。言語観では手話言語も音声言語と同じく神から人間に与えられた言語であり、その言語によって心を通わせ知識を伝えることができるのであった。彼らは、言語の表現形態が変われば人の思考も変わるとは絶対に考えてはいなかった。教育を受けないこと神を知らないことが人間として不幸なことであった。

もう一方は、創造時における神の啓示は普遍的なものであり、人間の理性だけでそれを十分に理解できると主張した。人間の理性を信じ人間の善性を信じた。生活の中心を来世におくよりも現在の理想的社会の実現に関心を持った。両者とも同じように、社会の矛盾を無くそうと努力し人間の幸福の実現追及に関心を持ったが、その根本は違っていた。発音の指導を進めたボストンのコンコード・グループは後者の立場であった。「神は人間の心の中に存在し、イエスもわれわれと同じ人間」<sup>58</sup>、ただし偉大な欠点のない人間であった。言語と科学知識を重んじ、理性的な人間の進歩を信じた。その言語観によれば、言語を獲得する能力は人間に潜在的にあるが、言語の発達がなければ思考はなく<sup>59</sup>、その言語には手話は含まれなかった。

## 註

1 「…エドワーズ・ドワイトの牧会していたボストンのパーク・ストリート会衆派教会は、19世紀の大半にわたってニューイングランド正統神学の牙城であった。ユニテリアンに対するこれら正統派の断罪と回心への祈願は激越なものであった。正統派にとり、ユニテリアンは不信仰の一步とみられ、やがて彼らは神にたいするすべての信仰を喪失し、懷疑主

義と無神論に墮ちることは必定と考えられていた。…ハーヴァード大学は1811年から1819年の間に教授陣も学生もユニテリアンとなった」

(柳生望『アメリカ・ピューリタン研究』日本基督教団出版局、1981、p. 368f.)

ボストン会衆派教会の牧師であったウィリアム・エラリー・チャニング (William Ellery Channing, 1780-1842) は、1819年ユニテリアン協会の人々を前にして「ユニテリアン・キリスト教」という説教を行い、一躍ユニテリアンの指導者になった。1820年には「アメリカ・ユニテリアン協会」が組織されている。T.H.ガローデットが神学を学んだアンドヴァー神学校 (Andover Seminary) は、ハーヴァード大学がすでにユニテリアンたちの勢力によって占められたのに対抗して、正当派カルヴァン主義を回復させるために1807年ボストンの北部に作られたものである。「新大陸に渡米したピューリタンたちがひたすら求めたものは真実の信仰であった。言葉を換えて言えば、自己の自由な意志に従ってしんじうる信仰であり、その信仰の自由を譲るために、契約によって社会を形成したみである。「契約」(Covenant)はその根底において個人の自由と権利を前提とするものである限り、そこには合理精神が潜在する。それはやがてガリレオ的な科学精神とロック的な啓蒙思想の影響を受け、18世紀に入って商工業社会が東部に発達するカルヴァン主義は崩壊の危機を招いた。信仰復興運動によって新しい姿においてカルヴァン主義は回生したとはいえ、ハーヴァード大学を牙城として信仰の自由主義化は進み、合理主義の立場に立って三位一体説を否定し父なる神は単一人格でイエスは人間であり贖罪の教義は無意味であるとした単一神論—ユニテリアン (Unitarians) が誕生した」

(曾根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局、1986、p. 153f.)

2 F.R.バッツ、L.A.クレメンツ、渡辺晶他訳『アメリカ教育文化史』学芸図書、1976、p. 189.

3 「ニューイングランドにおけるカルヴィン主義の牙城ともいべき会衆主義教会（日本で組合派教会と稱せられたもの）のなかから、十九世紀当初に反カルヴィン主義的自由神学を標榜するユニテリアン主義が生まれ出たことは、アメリカの基督教史を通じて最も大きな出来事の一つであろう。ジョナサン・エドワーズにおいて最高潮に達したカルヴィン

主義、即ち教派的に最も正統的なピューリタニズムは、「大いなる覚醒」運動 (the Great Awakening, 1734-44) によって確かに復興したのであったが、それとともに特にこの運動の敬謙主義的な性格を本質的に備えているバプティスト及びメソヂスト等の教派の勢力も盛んになってきた。…

エドワーズの教派である会衆主義教会は、ニューイングランドを中心としていたために、十八世紀後半にアメリカの知識人の間に大きな影響を興えた理神論、あるいは理神論のもたらした無神論的傾向と接觸し、その結果何時しか厳格なカルヴァン主義の体系も一つ一つ崩れてきた」(アメリカ学会訳編『原典アメリカ史 (第三巻)』岩波書店、1953-1970年7th ed. p. 326f.)

- 4 H.マン (Horace mann) をユニテリアンの立場に立つ人と見るかそうではないと見るかは、その立場によって異なってくるが、マン自身は、少なくとも正統派のピューリタンの立場を表明することは時代の要請に応えるものではないと理解していた。「彼は、公立学校内に、「宗派性のない」宗教教育を確立するために、勇敢に闘った。しかし、「宗派性のない」宗教教育は、アメリカでは、実現不可能であることが、まもなくわかった。なぜならば、この国では、宗教は、宗派という鑄型にはめこまれ、特定の宗派の形式を作り、固定化してしまっていたからである。だから、ホレイス・マンのような発想は、多くの福音主義プロテスタントの人々からみれば、「ユニテリアン」のように思われたし、逆にユニテリアンやローマ・カトリックその他の人々にしてみれば、福音主義プロテスタントのように写ったわけである」(S.E.ミード、野村文子訳『アメリカの宗教』日本基督教団出版局、1987、p. 137.)
- 5 Kenneth Scott Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*(New York, 1973-1975, 7V), p. 424., S.E.ミード、野村文子訳『アメリカの宗教』日本基本監督教団出版局、1987、p. 199.
- 6 「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」(マタイによる福音書、vid.7章17節)。  
「悪い実のなる良い木はないし、また良い実のなる悪い木もない。木はそれぞれ、その実でわかる」(ルカによる福音書、vid.6章43,44節)  
「主のみこころにかなった生活をして真に主

を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至るのである」(コルサイ人への手紙、vid.1章10節)

- 7 L.H. Woodruff, "Moral Education of the Deaf and Dumb," A.A.D., III (1851), 65f.
  - 8 L. Weld, "History of the American Asylum (2)," A.A.D., I(1848), 98f.
  - 9 L.H. Woodruff, op. cit., 65.
  - 10 Ibid., 66.
  - 11 J.A. Jacobs, "To Save Soul, the Great Duty of the Teacher," A.A.D., VIII(1856), 211.
  - 12 Ibid., 212.
  - 13 I.L. Peet. "Moral States of the Deaf and Dumb Previous to Educations, and the Means and Results of Religious Influence among Them," A.A.D., III (1851), 211.
  - 14 William E.Tyler, "Qualifications Demanded in an Instructor of the Deaf and Dumb," A.A.D., VIII (1856), 202.
  - 15 C.Stone, "The Religeous States and Instruction of the Deaf and Dumb," A.A.D., I (1848), 133.
  - 16 I.L. Peet, "Moral States of the Deaf and Dumb Previous to Education, and the means and results of Religeous Influence among them" A.A.D., 212.
  - 17 C.Stone, op. cit., 136f.
  - 18 W.E. Ijams, "Culture," A.A.D., IX (1857), 222.
  - 19 Ibid., 223.
  - 20 John R. Burnet, "Biographical sketch, in Memorial of Harvey P. Peet, Ph. D., LL. D." A.A.D., XVIII (1873), 72.
  - 21 上野益雄「『聾問題教育史』II, III, (筑波大学1987, 1988) において主な教育者の伝記を扱っている。
  - 22 T.H. Gallaudet, "Expediency of Teaching theh Deaf and Dumb to Articulate," *Christian Observer*, XVII (1818), 514-517.
- T.H. Gallaudet, "The Language of Signs Auxiliary to the Christian Missionary," *Christian Observer*, XXVIII (1826), 592-599.
- たとえば、彼はイザヤ書35章5節の「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く」という箇所を引用しながら、聾啞者の手が、耳の役目をしていると考えている。神から聾啞者に与えられた言語は、この時代の教育者にとっては、躊躇なく手話の言語であった。

- T.H.ガローデットは、後の口話法の立場に立つ人々からは低い評価しか与えられていないのに引きかえ、彼の意見は、この時代の同僚・後輩の教師たちからは規範的で模範的な模範的なものとして尊敬の対象となっていた。
- 23 T.H. Gallaudet, "The Language of Signs (2)," *A.A.D.*, I (1848), 80.
- 24 J.A. Jacobs, "Teaching the Scriptures Made Easy," *A.A.D.*, VIII (1856), 207.
- 25 q.v. T.H. Gallaudet, "The Natural Language of Signs (1)," *A.A.D.*, I (1847), 55-60.
- q.v. T.H. Gallaudet, "The Natural Language of Signs (2)," *A.A.D.*, I (1848), 79-93.
- 26 H.P. Peet, "Notions of the Deaf and Dumb before Instruction," *A.A.D.*, VIII (1855), 10.
- 27 Ibid., 2.
- 28 Ibid., 19.
- 29 Ibid.
- 30 Ibid., 9
- 31 Ibid.
- 32 Ibid., 2f.
- 33 Ibid., 20.
- 34 Ibid.
- 35 Ibid., 4.
- 36 Ibid., 5.
- 37 Ibid., 19.
- 38 Ibid.
- 39 Ibid.
- 40 Ibid., 16.
- 41 18世紀ヨーロッパとアメリカのキリスト教には、二つの運動があり、それは合理主義と敬謙主義であった。両者の運動には共通点が多くあったが、根本的なところでは異なり、それぞれが独立した基盤に立っていた。政教の分離、信仰の自由といった事柄については共に戦ったのである。特にアメリカは、グローバルに見る時に「合理主義と敬謙主義の宗教上の相違点を最少限度にして、むしろ一致点を積極的に強調する傾向にあった」(S.E.ミード、野村文字訳『アメリカの宗教』日本基督教団出版局、1978、p. 88.) どういう観点から見るかによって違ってくるが、筆者は両者の根本的な信仰の違いに特に注目している。
- 42 Twenty-Second Annual Report of the American Asylum for the Deaf and Dumb. 1838, pp. 13-24.
- 43 Ibid., pp. 26f.
- 44 H.P. Peet, "Notions of the Deaf and Dumb before Instruction, Especially in regard to Religious Subjects," *A.A.D.*, VIII (1856), 20f.
- 45 W.H. Corning, "Belief in God, Connatural to the Mind," *A.A.D.*, VI (1854), 134f.
- 46 I.L. Peet, "Moral States of the Deaf and Dumb, Previous to Education, and the Means and Results of Religious Influence among Them," *A.A.D.*, III (1851), 212.
- 47 C. Stone, "The Religious State and Instruction of the Deaf and Dumb," *A.A.D.*, I (1848), 134.
- 48 H.P. Peet, op. cit., 34f.
- W.H. Corning, op. cit., 134-141. で「聾啞者の信仰は生れつきには持てないのか？」という質問に対して、L. Weld, C. Stone, T. Gallaudet, A.B. Huttonらが「信仰は自然に持つようになるものではなく、教えられなくてはならないものである」と答えている。W.H. Corningは会衆派の牧師であったが、必ずしも聾啞施設の教師たちと同じような、はっきりした考えを持っていたわけではなかった。今後に残る問題である。
- 49 Ibid., 32f.
- 50 Twenty-Second Annual Report of the American Asylum, 17.
- 51 Ibid., 18.
- 52 H.P. Peet, op. cet., 36
- 53 Ibid., 39.
- 54 Ibid., 38.
- 55 Ibid., 42.
- 56 Ibid., 41.
- 57 Ibid., 42.
- 58 曾根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局、1987、p. 157.
- 59 言語の発達がなければ思考がないという考え方は19世紀末から20世紀前半をとおしての児童心理学の主流の考え方であった。

## Summary

# The Religion in the History of the Education for the Deaf in the 19th Century

**Masuo Ueno**

In the history of education for the deaf, American asylums of the deaf and dumb in the 19th century, Religion played an important part in the education of the deaf. Those who hold the responsibility for the education of the deaf were mainly ministers of the Congregational Church.

- 1 . Why were they concerned in the education of the deaf ?
- 2 . Why did they choose sign language in the education ?

Almost all of main teachers in the early period of deaf education came from Yale College. When they were students of Yale College, they reformed themselves and made profession of faith. They made up their mind to be engaged in missionary work. They thought like this. "The work for the deaf is better to answer the God's request. For the deaf cannot hear the good news of God in this christian land."

The ministers who taught the deaf students in the asylum choose sign language to teach the Bible lessons. It is the most important thing to teach the notion of God. Ministers or teachers of the deaf in the asylums thought that the deaf must learn the knowledge of religious matters. They insisted that the faith can not naturally come out from the mind of human being. According to their opinion, the life of this world exists to prepare the another future world.

On the contrary, S.G. Howe who was a unitarian thought "The spoken language is the first thing, and the most important thing."

"The children must learn speech, and after that they can understand the love of God and religious thing." S.G. Howe who insisted on the oral method and excluded the sign language was different from ministers in the asylums. S.G. Howe's opinion was as follows. "Spoken language was the first thing and indispensable to become a rational human being."

There were two different views on religious thought among the manualists and oralists, The purpose of education was different also. One was to teach the religious matters, the other was to teach the spoken language.

**Key word :** Religion    Unitarian    Asylum of the deaf    H.P. Peet